

設問 1

【解答例 1】

近代社会の製造と流通のシステムの中で人間はサービスの消費者もしくは購買者となることで、自然とその構成要素や産物との関わりや「作る」という生業の基本を喪失しがちである。しかし、料理でも、農業、漁業やものづくりでも、自然の状況を感じて、それにはたらきかけて生活することが基本であり、そこに美が宿る。

【解答例 2】

現代社会では、利便性の向上により自身の身体と自然とのじかのやりとりが免除されている。自身の経験と目の前にあるものから刺激を受け、悟性が働き確信的にわかることが重要だ。装置や媒体を介するのではなく、自己の身体と他の生物や人たちが生身であいまみえ、交感するなかで時間をかけて美的感覚が形成されていく。

設問 2

【解答例 1】

2つの資料に通底するのは、常識を相対化し、批判する姿勢だ。美味しさの基準はアプリオリなものではなく、経験を重ねることで身体に蓄積される個人的なものである。社会的に承認された価値観や表現は、芸術においては退屈でしかない。「生きる」とは単に個体として安全に生きのびることではなく、むしろ個人的で非合理的なものに喜びを感じることで自分なりの生きることの意味が見出されるのだと私たちに教えてくれるのが文化だ。

【解答例 2】

レシピやコンタクトレンズのようなツール、笑顔など社会的に承認された価値に基づく行為は社会的に理解されやすい。それは「生きのびる」ために行われることだからだ。それに対し、料理での自分に蓄積された経験による判断や、社会的には欠点とされる性格を短歌で詠むことがある。これらは直感的に何が良いかをわかるということだ。「生きる」には、社会や自身の経験に基づいた価値判断が多分に含まれている。

設問 3

【解答例 1】

近代の科学は、現象を定量的に測定し、それに基づいて理論的な予測を立て、実験観察によってその理論的予測が正しいかどうかを検証する。それは私たちの生存にとって、多大な貢献をなした。だが結局のところそれは、たとえばGDPといった定量的に計測可能な社会的価値を最大化することには寄与しても、きわめて個人的な生活において大切な価値とされるものを掬いとすることはできない。人々の生活感情としての豊かさを実現するためには、どこかで研究者の皮膚感覚といった直観的なものに根ざした、定性的な研究が不可欠である。

【解答例 2】

ものを質的に見る定性的研究は、性質を数であらわすための第一歩である。現代科学は、線の形で進歩している。しかし、科学は細分化された領域の間に取り残された領域があり、対象全体を覆う形にはなっていない。測定しているものの性質が明確でない場合には、数字が自然の実態を表さない場合がある。この線状の科学は、「生きのびる」という生命維持に通じる。すなわち、目的が明確であるということだ。それに対し、「生きる」がわかりにくいのは、個々人の価値に由来し、個別な目的の全体を覆うからである。

設問 4

【解答例 1】

自らの身体と、自然の中の対象とが生身で出会い、そこに共感を抱くことができるようになって初めて、真に美的なものが生成される。そのためには、素材の根幹にあるものにより深く、時間をかけて関わっていかなければならない。その際自然のものは、単なる素材や道具ではなく、私たちの生活世界を構成する重要なものである。

【解答例 2】

ものを外から手段として考え、手段として見るのではなく、その中に入ってその気持ちを理解する、すなわち自分がその一部となることで、手段として役に立つようになる。農業や漁業、ものづくりにおいて、その営みが行われる自然環境をたんなるツールとするのではなく、その中に入って、持続的に関係を持つことが必要である。

設問 5

【解答例 1】

従来の科学の分析的方法は、自然や生命といった全体性のある部分を現象として切り取って、これを定量的に計測・分析することで、そこに成立する因果関係を理論的に再現してきた。しかし自然、とくに生命や人間の知能は、より複雑で、そのような分析になじまない。表層的には生命や人間の知能のふるまいを再現できるかもしれないが、生命にとって本質的なもの、あるいは人間の知能の存在論的固有性にまで深く遡行することはできない。私たちの生命や知といったものの意味を問うことは、従来の科学の方法を超えたものとなる。

【解答例 2】

「生きる」ことは個人の身体を介して周囲の環境との交感によって経験を蓄積していくという、個別的で変化に満ちた行為だ。したがって「生きる」ということに向きあうための研究では、既存の論理やデータに捉われて「わかった」つもりにならず、絶えざる好奇心を以て、自身の目で研究対象を性質面から観察し続けることが求められる。これが定性的研究の基本姿勢であり、個別的な生とこのように向きあい続けることによって、研究者は新しい発見を得て、自らも変わり続けていくことができる。

設問 6

【解答例 1】

(a)

立地から、自動車をかなりの頻度で運転して、生活の用を足すことになる。また一軒家の住宅もアトリエも、マンションと比べて夏は暑く冬は寒いので、光熱費がかかる。ゴミを近くの自然山林で焼却しようとする、法規制上問題があり、またペットボトルその他は回収に出さなければならない。Bさんは小説家なので、取材のため出かけることが多いが、駅までが遠いので、不便である。周囲の農家が作物を持ってきてくれるが、Bさんは何を返礼したらよいか困り、結局ふるさと納税の返礼品を使い回ししている。またBさんの妻は、彫刻で生じた大量のゴミを生活ゴミとして出し、その結果地元の自治体から産業廃棄物ではないかと注意される。

(b)

住まいかた、暮らしかたについて、まず①食と②運動と睡眠という2つの観点から分析する。①食については、食事の時間のみならず、食事を外食ないし中食に頼らずどのくらい素材から自炊したか、またその素材の調達方法についてチェックする。Bさん夫婦の

記

録と報告の煩を避けるため、電子レンジにいつどのくらい使用したかを記録する仕組みを組み込んだり、調理前に食材をすべて並べて写真に撮り、これを画像分析でデータ化したという方法を探る。

②運動と睡眠については、どのようなパターンでどの時間にそれを行ったかを計測するわけだが、睡眠については測定は簡単である。ここでいわゆる家事と呼ばれるものにどのくらいの運動量が生じたかを解析したい。たとえば庭の雑草を抜いたり、シャツをクリーニングに出さず、アイロンをかけたりしているかどうかをチェックするのである。

最後に、BさんとBさんの妻に、日記をつけてもらう。その日記は、毎日上記の①と②に関する「発見」を必ず一つ、簡単に記述してもらうというものである。これは定性的記述であって、定量的に解析可能な上記①②と組み合わせ、住まいかた・暮らしかたの変化を追跡するのである。

【解答例 2】

(a)

Bさん夫妻は基本的に在宅ワークなので、都心に出ることは減多になくなり、日常を自宅周辺で過ごすことになる。時間のあるときは自宅周辺を散歩したり、地元の農家と交流を深めてその農産物を分けてもらったり、自分たちでも家庭菜園を始めることも考えられる。そんな生活の中で旬の農産物を使った家庭料理を日々食し、気候や自然の景観の変化をリアルに体感し、それに応じた暮らしをしていくことになるだろう。しかし、近所に大型商業施設や図書館などがいないため、一部の生活必需品や小説家であるBさんの文献資料の購入のためにオンラインショッピングの利用が増え、社会を支える科学技術の価値を改めて意識することにもなるだろう。

(b)

Aさんは、Bさん夫妻が一年を通じて気候や周辺の自然環境の変化をどのように体感し、どのように対応していくのか、その暮らしかたを調べたいと考えた。主観的・客観的記録をもとに、人が気象現象や風景の変化をどのように捉え、それにどのような対応をするのか、また、長期にわたって記録することで、生活のしかた、環境への対応のしかたに変化があるかどうかを調べ、データだけでなく人と自然のつながりや人の体感を意識したスマートハウスに活かせる知見を得ることを目指す。

調査方法として、Bさん夫妻が毎朝起床時に外の風景や体感をもとに、気候について主観的に感じたこと（蒸し暑い、凍える等）、服装や冷暖房器具の使用状況、外出の有無（散歩や買い物等）、周辺環境の変化で気付いたこと（セミが鳴き始めた、水たまりが凍った等）、その他感じたこと（温かいものが食べたい、セミの声がうるさい等）を、日記のように記録してもらう。各日の天気、気温、湿度も記録する。このようにして、人の体感とそれが生活に及ぼす影響を把握し、自然と持続的に関わりながらも、心地よい生活を実現する住まいづくりのための手がかりを得られるようにする。

【解答例 3】

(a)

フリーランスで創造的な仕事をする人間は一般的に、創作活動を中心にした不規則な生活を送りがちだ。しかし人工的で閉鎖的な都心のマンションと比べ、自然環境に恵まれた郊外の戸建て住宅ならば、生活リズムが規則正しくなり、季節の移り変わりにも敏感になる。家庭菜園やトレッキングやDIYなどを通じて自然を五感で受け止める機会が増え、近隣住民と交流も活発になる。一方、豪雨や積雪などを経験することで自然の力の大きさを実感し、自然に対して謙虚になるとともに、コミュニティ意識も高まる。こうした経験によって環境への関心と感受性を高めることは生活全般に留まらず、作品の題材や作風にも変化をもたらすだろう。

(b)

Aさんの研究は住環境と住む者の幸福感の関係に焦点を当てるものになる。とりわけ嗅覚は脳辺縁系につながることで、本能的な行動や喜怒哀楽などの感情にダイレクトに影響を与え、自律神経、免疫、ホルモン分泌もコントロールする。自然界には複雑で多様な香りが満ちており、さらにBさん宅は天然素材が優先的に用いられ、薪ストーブやキッチンのハーブなどが豊かな香り環境を作り出している。こうして都市部よりも多様な匂いに感覚を刺激され、また鎮められることは、創作活動にも何らかの影響を与えるだろう。

Aさんは香り環境が感情や感覚に与える影響を探るため、一定期間Bさん宅に滞在することにした。同じ環境で生活し、日々の何気ない会話の中に用いられる形容詞や感動詞に注目することで、Aさん自身を含む各人の感情の動きを記録し、そこにどのような匂いが介在したのかということガスクロマトグラフィーで分析する。これによって嗅覚と感情の相関関係を個人レベルと一般的な傾向の両面から探ることができれば、快適な住環境のデザインに生かせると共に、経年変化を記録することで、家への愛着や記憶との関係を探ることもできるだろう。

【解答例 4】

(a)

Bさん夫妻の仕事としては、近隣の農家や河川、自然山林などの周囲とのかかわりをベースとした実感に基づく創作活動を行っていくことが考えられる。一方で、閑静な住宅街は住むという機能に特化され、医療・介護・福祉施設・日常的な買い物などへのアクセスといった多機能な街とはかけ離れてしまう。また、街の流動性が希薄で、居住者の年代・属性が均質であり、その状態が固定化されやすい。これらをふまえれば、文献1～3にある自然との直接的なかがわりが担保されても、均質的な他者とのかかわりに交流が限定され、年齢に合わせたサービスへの距離も遠くなる暮らし方になっていくと考えられる。

(b)

Aさんが抱える困難として、Bさん夫妻の日常生活を直接見ることができないことが挙げられる。彼らの創作物を見るだけでは外から調査するだけで、暮らしとの関係は見えてこない。まず、彼らの街における生活を把握するために、日常の買い物や自治会への所属の有無といった人的つながりを調査する必要がある。開発の進むナノメッシュ電極を利用したウェアラブルデバイスを活用し、いつどこで何をしたのかという行動を可視化し、買い物の傾向をITで集積することで生活の経験の蓄積を見ていく。加えて、彼らが居住地域のなかでコミュニティに属するか否かを調査する必要がある。閑静な住宅街では高齢化や均質的な他者との交流に限定されやすい。リアルに集まれる場があれば、どのような他者といかに関わりながら創作をしているかを観察することもできる。街の中の多様なつながりを研究者が直接見たうえで、その地域特性や住環境に何が求められるのか、閑静な住宅街の現状に即した場に何が必要なのかを考えることも研究の視野に入ってくる。ここで現代科学の知見が有用なものとなるであろう。